

明治学院説教（114） 2008年5月18聖霊降臨節第二主日

（明治学院教会創立五周年記念礼拝）

「“人格的感化”の連鎖を」

牧師 岩井健作

詩編121編「わが助けは天地をつくりたまえる主よりきたる」（2、文語）

- 1、よい意味での「人格的感化」が明治学院には生きている。学生はそのことを期待し（『白金通信』（no. 445, 2008, march 参照）、学院関係者はそれを根拠に日常を営む。「出会い」は人格形成の深奥な出来事であり、「キリスト教主義」を標榜する「学院」の骨格である。
- 2、学院全般の「人格的感化」は教育、研究、文化、交流などに潜在化し、教会は「人格的感化」の根源を「神との出会い」「イエスとの出会い」として顕在化した言葉で説く。この潜在と顕在との関連は「合意書」（2006年9月締結、2007年11月「学院広報」に掲載）で「教会は・・・福音宣教の活動を通じて学院のキリスト教主義教育の推進に貢献する・・・」と文言化されている。だが学院関係者が無意識のうちに、「キリスト教主義教育」を暗に「布教」と等置していることはないか。これは歴史の「キリスト教」の責任に帰することでもある。けれど世間の「キリスト教主義」への善意の評価は根源的に人格的感化を含む「人間の尊厳」の骨格にある。
- 3、その「人間の尊厳」の根底が崩されている。周知の「新自由主義」による「市場原理主義」の普遍化である。結果は「格差社会」「貧困」「ワーキングプア」「人間廃棄」「人格破壊」などである。堤未果著『ルポ貧困大国アメリカ』（岩波新書, 2008）はその現実をリアルに描写する。
- 4、宗教（キリスト教）がそれとの対抗軸を構築するには、文化、哲学、芸術、人文、科学、社会の諸科学との連携無しには、その使命を果たし得ないことの認識は大事である。宗教原理主義はむしろ人間破壊の補完をしかねない。
- 5、詩編121編はその「連携」を暗示する。信仰者が1節を素通りして2節以下の「信仰告白的言説」にのめり込むことを注意しなければならない。1節の冒頭「われ山にむかいて目をあく」は、文学、芸術、文化の世界である。文学者太宰治は作品「桜桃」の表題にこの句を添えた。文学的人格の感化は計り知れない。明学にはこのような文化の雰囲気がある。教会はその学院人との連鎖を忘れてはならない。1節の後半には「わが助けはいずこよりきたるや」とある。これは問いであり、疑問であり、哲学の思索である。最近ベルナール・ステイグレルの『愛するということ－「自分」を、そして「われわれ」を』（新評論 2007）を読んだ。フランスの第一線で活動するこの哲学者の、特異化・個体化の可能性を奪われた人間の「生きにくさ」が、人々を動機のない犯罪や暴力へと駆り立てることについての思索は深い。これはまた学院人の哲学的思索でもあろう。教会はそんな思索と連鎖を怠ってはならない。詩編はそれに続けて「わが助けは天地をつくりたまえる主よりきたる」と世界を包括する「救い」を語る。その包括をすべての学院人と共有することが、創立5年からのこの教会の出発ではないか。